

学位請求論文審査報告要旨

2015年6月10日

申請者 原田幸一

論文題目 言語の機能と変異の関係 ―若年層の日常会話データをもとに―

論文審査委員 石黒 圭
庵 功雄
朝日祥之

1. 本論文の内容と構成

音声言語は書記言語にくらべて語の形態面・用法面での変化が速く進み、とくに若年層の会話において、そうした変化が先取りして観察されることがよく知られている。本論文は、若年層の日常会話をデータとし、社会言語学の観点から言語の機能と語形の変異について定量的に分析し、その関係を明らかにしたものである。

扱われている形式は、ターンの冒頭部に位置し、運用上の機能、形態上の変異の両面で多様性を帯びている「トイウカ」「チガウ」「ダカラ」「タシカニ」の四つである。

全9章から構成され、その構成は以下の通りである。

1章 はじめに

2章 先行研究と本研究の枠組みと目的

2.1 言語の機能に関わる先行研究

2.2 実際の会話にもとづく言語変異研究

2.3 本研究の枠組みと目的

3章 データ

4章 若年層の日常会話における「トイウカ」の使用

4.1 はじめに

4.2 先行研究

4.3 データ

4.4 用法分類

4.5 分析

4.6 考察

4.7 まとめ

5章 首都圏若年層の日常会話における「チガウ」の使用

5.1 はじめに

- 5.2 データ
- 5.3 先行研究
- 5.4 用法分類
- 5.5 分析
- 5.6 考察
- 5.7 まとめ
- 6章 首都圏若年層の日常会話における「ダカラ」の縮約形
 - 6.1 はじめに
 - 6.2 先行研究
 - 6.3 データ
 - 6.4 分析の方法
 - 6.5 分析
 - 6.6 考察
 - 6.7 まとめ
- 7章 大学生の日常会話における「タシカニ」の使用
 - 7.1 はじめに
 - 7.2 データ
 - 7.3 先行研究
 - 7.4 理論的背景
 - 7.5 用法分類
 - 7.6 分析
 - 7.7 言語変化に関する考察
 - 7.8 まとめ
- 8章 考察
 - 8.1 4章から7章までの分析結果のまとめ
 - 8.2 4章から7章までの分析結果にもとづく全体的な考察
 - 8.3 共時的に見た言語の機能と語形変異の関係
- 9章 まとめと今後の課題
 - 9.1 本研究のまとめ
 - 9.2 今後の課題

参考文献

会話抜粋の転記法

2. 本論文の概要

本論文の章立てにしたがい、各章の概要を順に紹介する。

1章では、社会言語学の立場から本論文の位置づけを行っている。例えば、「トイウカ」という言語形式は、近年縮約形「てか・つか」の使用が見られるが、「というか」「てか」「つか」の使い分けといった、会話における「トイウカ」の語形の使い分けは、内省によって明らかにすることは難しい。そこで、本論文が、語形の使い分けの問題のうち、こうした、内省では判断できないレベルの使い分けというマイクロな問題を、日常会話のデータを用いて帰納的に明らかにするものであるとする本論文の基本的立場が述べられる。また、日常会話をデータとして語形変異の分布の解明を目指す点で、変異研究と談話研究という社会言語学における二つの研究の流れの上に位置づけられ、これら二つの研究を結びつけるものであることが示される。

2章では、本論文に関わる先行研究がまとめられ、本論文の枠組みと目的が述べられる。本論文では、言語の機能的側面へのアプローチとして van Dijk の意味論レベルと語用論レベルの区別が用いられ、意味論レベルの意味は、言語形式が示す語彙の意味と命題間の論理的意思を示すこと、語用論レベルの機能は、言語形式が担う言語行為的機能と話題調整機能を示すこととされる。分析の対象とする言語形式の選定は、実際に行われた会話データを用いる利点を重視して行われ、話し手と聞き手との間で続けられる発話のやりとりにおいて、相互作用の特徴がとくに観察されると考えられる部分としてターン冒頭部が目目され、ターン冒頭部で使用され、標準形に対する変異形が観察されるいくつかの言語形式を対象として定量的分析を進めることが宣言される。

3章では、データについて説明されている。本論文で用いられるデータは、筆者が2009年と2010年に収集した若年層による日常会話データである。首都圏の大学に通い首都圏に在住する大学生130名（男性76名、女性54名）に協力を仰ぎ、親しい友人同士で参加してもらって収集した、1グループあたり約1時間、総収録時間数約53時間半（全部で51グループ）の日常会話データが対象となっている。会話参加者130名の内訳は、首都圏若年層が50名、非首都圏若年層は80名であった。51グループのうち、首都圏若年層だけで構成されるグループが8グループ、非首都圏若年層だけで構成されるグループが16グループ、それ以外が27グループとなっている。

4章から7章までが本論である。4章では、「てか・つか」などの縮約形の使用が指摘される「トイウカ」を分析している。先に説明したデータのうち、51グループ分すべてのデータが使用されている。分析の結果、「トイウカ」の用法が意味論的用法（＜暫定提示＞＜言い換え＞＜譲歩補足＞）と語用論的用法（＜話題導入＞＜話題維持＞）に分類できること、種々の形式のうち縮約形「てか」が出現数と使用者数が最多であること、テ系では意味論的用法より語用論的用法のほうが「てか」の割合が高く、ツ系では意味論的用法より語用論的用法のほうが「つか」の割合が高いこと、意味論的用法と比較して語用論的用法が占める割合が増加していることが明らかにされている。また、分析結果にもとづき、

縮約形「てか・つか」の使用に関して単純化の傾向を指摘し、単純化を進める要因として頻度の増加が関わる可能性が主張されている。

5章では、「ちが・ちゃ」という新形式の使用が見られる「チガウ」を分析している。先に説明したデータのうち、首都圏若年層によるデータが使用されている。分析の結果、新形式は形式「ちがう」の次に出現数が多いこと、「チガウ」が後接要素を伴わない場合、新形式が半数を占めること、新形式は用法によって使用傾向が異なることが明らかにされている。新形式は<否定>と<話題維持>で使用され、「チガウ」が後接要素を伴わない場合、<否定>で新形式が半数近くを占め、<話題維持>で新形式が多数を占めていたとされる。分析結果にもとづき、新形式の使用に対して単純化の傾向が指摘されており、とくに、「ちが」に関しては、文法的な単純化として、形容詞の語幹終止用法からの類推の可能性が指摘されている。

6章では、「だか・だ」などの縮約形の使用が目立ついわゆる順接の接続詞「ダカラ」を分析している。先に説明したデータのうち、首都圏若年層による二者間の会話データが使用されている。分析の結果、「ダカラ」の縮約率は、後続ポーズの有無・用法・性別と有意な関連があり、後続ポーズがあるよりないほうが高く、帰結的用法より非帰結的用法のほうが高く、女性より男性のほうが高いことが明らかにされている。分析結果にもとづき、縮約率がこれら3変数と有意な関連がある背景要因として、「発音労力の軽減」「形態的な合理化」「社会規範の性差」が主張され、3変数の要因としての妥当性が示される。さらに、縮約形を標準形からの言語変化の中に位置づけ、「それだから」>「だから」>「だか/だ」という言語変化が想定されている。

7章では、近年単独で頻繁に使用される「タシカニ」を分析している。先に説明したデータのうち、約23時間10分のデータが使用されている。分析の結果、「タシカニ」の用法は3分類できること（自分が下し判断に対し間違いないとの認識を示す用法①と、自分以外の者が下した判断に対し間違いないとの認識を示す用法②、自分以外の者が下した判断に対し「そうだね」と同意する用法③）、用法③が6割以上を占め、ターン構成Ⅱ（一つのターンが「(感動詞+)タシカニ」で構成される）が最多で4割を占めること、典型的な形式は「たしかに」であり、変異形「たしかし」は出現数・使用者数ともに少ないこと、「たしかし」は用法③での使用に限られ、8割がターン構成Ⅱであることが明らかにされている。分析結果にもとづき、「タシカニ」の用法②から用法③への変化に関して「語用論的強化」と「コミュニケーションの効率化」という観点から説明が施され、「たしかに」から「たしかし」への変化に関して「発音労力の軽減」の傾向が指摘されている。

8章では、本論における分析結果をまとめ、全体的な考察を進めている。本論において分析した言語形式の全てで、用法がより語用論的である場合において変異形の使用割合が高くなっており、「テイウカ」「チガウ」「ダカラ」では用法がより語用論的である場合において語形モーラ数が短くなっていることが確認される。また、言語の機能的な観点から

各言語形式について、言語の機能と語形変異の関係に合理性という特徴が読み取られている。

そうした議論を踏まえ、共時的に見た言語の機能と語形変異の関係について以下の傾向が仮説として提示される。

仮説 1: ターン冒頭部で使用される言語形式が、意味論的用法と語用論的用法の二つの用法を有する場合、意味論的用法より語用論的用法のほうが変異形の使用の場となる。

仮説 2: ターン冒頭部で使用される言語形式が、意味論的用法と語用論的用法の二つの用法を有し、標準形と変異形という語形変異の分布が観察される場合、その言語形式の語形変異の分布には言語の機能的な観点から見て合理性という特徴がある。

これらの仮説に関連して、言語形式における用法拡張（意味論的用法から語用論的用法への拡張）がきっかけとなり、語形を変異させる要請が生じること、用法拡張により生じる不整合を解消させようとする中で語形を変異させようとする傾向が現れ、言語の機能と語形における合理性という特徴が現れることが主張され、更により大きな視点から、用法の異なりに対応した語形の異なりが生じる傾向は、「意味と形式の一対一対応」へと向かう傾向の現れとも考えられることも主張されている。

9章では、本論文の内容をまとめ、今後の課題について述べている。提示した仮説の検証のために共時的な事例研究を更に蓄積すること、通時的な観点から過去の会話データを発掘し、将来再び会話データを収集することにより用法変化と語形変化を実証すること、言語理論への貢献を見据え文法化などの言語変化理論との関連を考察することなどを今後の課題として挙げている。

3. 本論文の成果と問題点

本論文の成果は、以下の3点にまとめられる。

第一は、先駆性である。本論文は、談話レベルの機能を持つ語形変異を対象に、独自に収集した大量の会話データを活用し、定量的な分析を変異理論の立場から行っている。こうした研究は前例がほとんどなく、高く評価することができる。

第二は、客観性である。主観的な手続きが極力排され、客観的に取り出された言語形式が明確な基準で分類され、機能を扱うさいにも可能なかぎり客観的なテストフレームが採用されている。不十分な内省に頼りがちだったこれまでの研究と一線を画しており、分析方法に統一性が認められ、分析結果を把握しやすい点で優れたものとなっている。

第三は、応用性である。本研究は、地理的な差異を重視しない共時的な研究であるが、客観性の高い手続きでデータが扱われているため、言語変化の研究として、通時的な研究（歴史研究）、地理的な研究（方言研究）に大きな貢献をなすことが期待できる。また、日本語教育という観点からも、日常会話で高い頻度で出現しているにもかかわらず、気づ

かれにくいためにこれまで無視されてきた言語形式とその機能が精緻に分析されており、教育現場での応用の可能性もきわめて高いと見こまれる。

このように優れた面を備えた本論文であるが、問題点もいくつか存在する。

第一の問題点は、「変異」の捉え方である。本論文のなかでの「変異」と、変異理論研究で言われる「変異」との間に齟齬を感じられる。本論文では「標準形」「変異形」という名称が用いられているが、変異理論研究において、とくに本論文で引用されている Labov らの研究で述べるような、「変異」はあくまでも言語変化を捉える視点として設定されているものである。「伝統形」「革新形」という名称も一般に使用されており、「標準形」という捉え方にはより慎重な吟味が求められよう。

第二の問題点は、ターンの冒頭部への着眼という点である。本論文が、ターンの冒頭部に着眼することで、独自の視点と広がりを持ちえたことは事実であるが、変異という現象だけで考えるならば、ターンの冒頭部でなくても、別の興味深い現象が観察できた可能性がある。また、ターンの冒頭部に着眼するにしても、なぜターンの冒頭部なのか。取り上げられている四形式がターンの冒頭部で共通して特殊な振る舞いをするのはなぜなのかといった点をより深く掘り下げる必要があっただろう。

第三の問題点は、構成上の重複である。先行研究については2章で、データについては3章で詳述されているが、本論である4～7章でも先行研究やデータについて再度言及されることがあり、やや冗長な印象がある。4～7章は、学術雑誌に掲載された原著論文が下敷きとなっていることがその理由としてあろうが、博士論文としての収録にあたっては、より丁寧な改稿が必要となろう。

しかし、上述の問題点は、本論文がもたらした、豊かな学術的成果の価値を大きく損なうものではない。また、こうした問題点については、本論文の筆者にも十分な自覚があり、筆者の今後の活躍によって克服されることが期待される。

4. 結論

以上より、本論文が学位論文に値する優れた研究であることを認め、著者に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えられる。

最終審査結果の要旨

論文審査委員 石黒 圭
庵 功雄
朝日祥之

2015年5月26日、学位請求論文提出者、原田幸一氏の論文「言語の機能と変異の関係—若年層の日常会話データをもとに—」にかんする疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのにたいし、原田幸一氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、原田幸一氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験において合格と判定した。